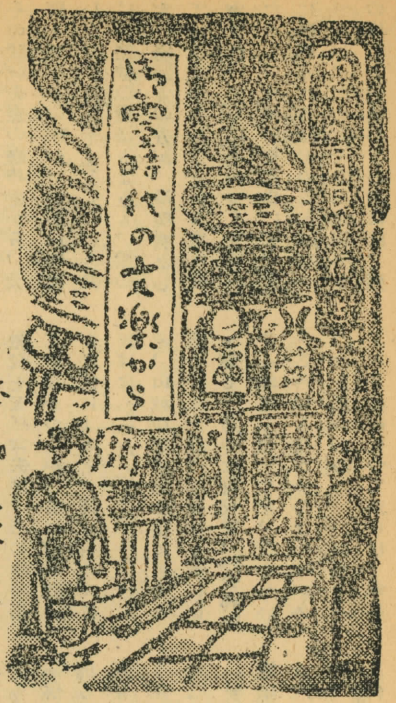

根のない浮草はいくらはびこつても、一たび水に押流されたら、跡方もなく行くへを失ふ。やどり木がいかに榮えても、もとの幹にたよる壽命でしかないといふのが、古典を尊重しなければならないとする、わたしの論の根本である。

かつてわたしは浮瑠璃のことを、堆漆の彫刻にたとへたことがある。知人に名工があつて、黑などを作るのに、朴の木などの木地に、生漆を塗つて蒔地とし、乾いたら研ぎ落して本塗にかゝるのが、塗つては研落し、研落しては塗上げることおよそ三百度、一個の木地を塗上げるだけに二三年かゝり、更にこれを彫刻するのには、毛筋一本・地紋一筆、あやまつて彫ずることがあつても、たちまち全體がキズ物になつて、數年の經營も水の泡になるのだからこれが製作の苦心は、到底想像の外であることを、この目で見て知つてゐたので、いろ〳〵見聞く演藝のうち、能樂のことは知らないが、その他では先づ義太夫こそ、共通するものではないかと思つたので、いまもさう思つてゐる。

わたしが初めて文藝の人形浮瑠璃に接したのはまだ御覽時代の明治三十五年一月、忘れもしない三日だつたと記憶してゐる。自分の思ひ出話で恐縮するが、その前日に北野の「朝妻」で、關西文學同好會といふ文學少青年の會があつて、東京から下阪した與謝野寛氏夫妻・小島烏水氏と、岡山から馳參したわたしとが、土地の肝煎小林天眠氏から招待されての觀聽であつた。前年の暮に堺の鳳晶子女史と結婚した與謝野氏は、この時新婚旅行だつたので、「春の夜や紋十郎は藝の神、津太夫老いて浪華の寒き」といふ一首の歌を寄せて、文樂の方は遠慮されたため、結局烏水氏とわたしと天眠氏と、後から天眠氏の家の人が一人加はつたやうで、座席は平場の中央、前から五側目あたり、本誌新年號の座談會記事によると、當時の料は二人詰だつたさうだから、多分三枡位ふつこ救かれたのだとう、眞中に行厨の提重なんか置かれても、ゆつくり見物することができた。

正月三ケ日のためもあつてか、入はざつと見て七八分位、發期したより狹くてきたない小屋だと思つたが、下地は好きなり御意はよしで、熱心に目をみはり耳を澄ました、といふのが當時義太夫に關する限り、生意氣に耳は肥えてゐるつもりでゐたからだが、明けてやつと二十二の若輩で、いまから考へると汗

類の至りながら、若し興行で何が好きかときかれたら、第一が義太夫、次が角力、それから芝居と答へてゐた時代だから、そのつもりで話を進める外ない。藝廻は『信仰記』の通しに、中が『吉田屋』、切が『重の井』であつた。

名人團平の三味線は、つひに聽く機會を得なかつたが、當時堀江の明樂座に立籠つて、文樂に對抗した先代大隅の一座は、岡山あたりへよくやつて來たし、その度に先輩の聽巧者から、大隅と團平との床が、いかに物凄いほどの壯觀であつたかと共に、美音の艶語りよりも、筒の太い筋語りの方が、淨瑠璃としてはまさつてゐるといふ風に教育され、すでにそのつもりでゐたから、文樂の初見參にも、別に壓倒されるほどのことはなかつたが、たゞ太夫や三味線引きの概して行儀がよい點には、感心したことをおぼえてゐる。

『信仰記』の方の印象は頗るぼけてしまつたが、いはゆる「ハラ〳〵屋」の呂太夫が出た時、九代團十郎が最もヒイキにして、越路（後の攝津大掾）以上といつてゐる太夫だと、側から鳥水氏が説明してくれた。大音無双といはれたその聲量にはさすがに驚いたが、一本調子で微妙な曲折に乏しく、大きな竹を割つてゐるやうな氣がした。聲の大きさでよく引合に出される先代七五三太夫は、この時は出てゐなかつたが、前に數回聽いた記憶によると、幅は呂太夫に及ばなかつたかも知れぬけれど、山城少掾の思ひ出にもある通り、三十三四年頃は「實にいゝ聲で」あつた時代で、『合邦』や『辨慶上使』など、こまかいところにもなか〳〵よい味があつたと思つてゐる。いはゆるバンバラ聲になつてからは、幸ひにして聽く機會を持たなかつた。

後の三代目越路は文字太夫時代で、師匠寫しの上品な美音であつたとおぼえてゐるが、十數年後に東京で聽いた時、サビのある澁い喉になつてゐたのには、別人のやうな感じがした。鐵幹氏が「藝の神」と詠んだ先代紋十郎は、それが先入主になつてゐたかも知れぬが、確かにうまいものだと思つた。その癖何と何とを這つたかはハツキリせず今も目の前に浮んで來るのは、『信仰記』の乳母侍從で、火の出るやうなはげしい立廻りに、全身のうねるやうな脈動が、どう見ても性ある人間としか思はれないことだつた。

『吉田屋』の餅搗きで、恐しく纖細な美聲の持主を、むら太夫（八代目）だと覺えてゐたところ、これまた十數年後東京で、三代目越路の同じ吉田屋に、同じ餅搗場を語つて、老來すこしも衰へぬ美聲が、一本調子なところまでそのまゝなのを、いつそなつかしいと思つたこともある。越路の流暢で停滯せず、含蓄の深い美音は、いま更いふまでもなく、いかにも耳ざはりよく聽き了つたが、それ以上の感動を覺えなかつたのは、當時いはゆる線の太い「大物」でないと、堪能できなかつた性癖に累はされたことは爭はれず、人形の方も初代玉造の健在だつた時代で、番附面の地位も承知しながら、殆んど印象に殘つてゐない。これも恐らく與謝野氏の歌に影響されたのと、何といつても初心の悲しさ、四肪の露出した立役人形のグロテスクよりも、シガの隱れやすい女形這ひの方に、まづ引付けられたことは否定できない。

こゝで意外に感じたのは、津太夫の藝に對する大阪の客の態度であつた。この津太夫はいふ

までもなく、近世の名人として通つてゐる二代目で、いはゆる「法善寺の師匠」だが、もう老年の上、若い時分からの難聲で、花やかな越路とは、まつたく對蹠的な在在であつたとはいへ、吉田屋が切れると、トタンに入場者の三分の一以上が、ぞろ〳〵と歸つていつてしまつたので、もと〳〵七八分の入だつた客席は、急に五分以下になつて、『重の井』の開いた時には、さながら引潮のあとのやうな淋しさを呈した。

これには鳥水氏も興のさめた顏をしたが、

「しかし僕は面白い話を聞いてゐる、毎日新聞だかの記者が、苦心談をきゝにいつて、まことにいひにくいことだけれど、師匠の聲は低いから、隅々まで行渡らせるためには、いろ〳〵苦心もあることでせうといつたところ、いえ、わたしの難聲は皆さまが御存じですから、今更苦勞しても及びませず、無理に調子を張らうすると、必ず藝が崩れますから、たゞこれまで修行したまゝを、すなほに語つてゐるだけで、別に苦心なんかいたしません。しかし御方便なもので、わたしが無心に語つてゐますと、不思議にかうお客さまの耳が、見台の前へ寄つて來るやうな氣がします、といつたさうだ、さすがに名人の心構へといふか、立派な見識だと思ふ」といはれたのに、わたしは強い感銘を受けて、今もまざ〳〵と耳底に殘つてゐる。

山城少掾の思ひ出によると、

「師匠はよく立見を氣にされて、わしの聲立見で聞えるか」とか、「立見の客、わしの淨瑠璃なんちうてた」とか、よく評判を氣にしてゐたさうで、ちよつと聞くと前の話と矛盾するやうだけれど、さういふ謙讓さがあればこそ、敢て迎合しない見識も生れるので、獨りよがりの夜郎自大でないところに、一層の床しさとえらさがあるのだと、新年號を讀んでから深にこの感は深くなつた。

當時津太夫は六十四歳、今から考へると、大した老齡ではなく、すでに六十七歳になつてゐた越路に比べると、三つも若かつたわけだが、一生花形であつた越路の大掾は別として、やつと二十を出たばかりのわたしたちには、よほどの老體に見えたはずで、しかも低音の難聲と來てゐるから、形勝の座席を占めながら、一寸油斷すると聞きとりにくいため、自然と見台の前へ耳を引寄せられたにちがひなく、まばらに殘つた客席も、水を打つたやうにシンとしてゐた。その中をしと〳〵と語つて行く太夫の喉からは、何ともいへぬ情味が湧いて、滾々と盡くるを知らなかつたといふのが、決して誇張でないことを斷言し得るので、段切れ近くの馬士唄など、何等の當込みも艷もなく、それでゐてしみ〴〵と迫る哀れが、思はず頬を濡らさせたのである。

打出して歸りに何といふ家だつたか、附近の露地にあつた川魚料理で、三人後酌を交しながら、わたしは一種の義憤のやうなものを感じて、淨瑠璃といへば大阪人の誰もが、自分たちで生んで自分で育てゝ、わが家の獨占のやうに振舞つてゐるけれど、津太夫の藝をきゝ分けるものが、文樂の狹い小屋の半分に足らないやうで、何の自慢になるのだと、怪しげな氣焰を吐いたことを忘れず、これは後に植村の經營が持切れなくなつて、松竹の手に渡つたり、御靈の小屋が燒けて四つ橋の新築ができるまでの間に、東京で文樂擁護會が出來たり、東京の出開帳が當り續けると、それが大阪での宣傳になつたりする度毎に、いつもわたしの大阪に對する憎まれ口の材料に使つたので、まことに相濟まないことだけれど、所詮は淨瑠璃を愛好し、尊重する故に外ならないこと諒とせられて、この機會にもう少しわたしの淨瑠璃に對するいろ〳〵ばなしを續けさせていたゞきたい。

（次號につゞく）